

Formative Assessment: Improving Learning in Secondary Classrooms

Summary in Japanese

形成的評価：中等教育における学習向上を目指して

日本語要約

評価は教育過程に欠かせないものである。最もわかり易い評価は、テストなどによって生徒が何を学習したかを測定する、言い換えれば、学校側に生徒の達成度についてアカウントビリティを負わせる総括的評価である。しかし、「形成的な」評価もあり得る。形成的評価とは、生徒の学力向上や理解度を頻繁かつ相互に評価することである。そうすれば、教師は、特定された学習ニーズに授業の仕方をより適切に適応させることができる。

形成的評価が総括的評価と異なるのは、形成的プロセスで収集した情報を達成度の要約としてではなく、学力の向上に利用するという点にある。学校レベルや政策レベルで形成的評価の原則を活用すれば、学力を向上させるべき分野を特定したり、教育制度の全体を通して建設的な評定文化を助長したりすることができる。各種調査によれば、形成的評価は生徒の達成度を向上させる最も効果的な戦略の1つである。また、形成的評価は生徒間の達成度の格差を少なくしたり、生徒の「学習の学習」スキルを開発したりするためにも重要である。しかし、形成的評価は体系的に実践されていない。特に、本書の主な対象であり、イノベーションや変革への障害を克服するのに困難を伴うことが多い中等学校ではそうである。こうした障害としては、教室をベースとした形成的評価と学校のアカウントビリティが一目瞭然となる総括的テスト（教師はテストのための授業をする傾向にある）との間に存在すると考えられる緊張関係や、評価と評定への体系的なアプローチ、学校側のアプローチ、教室におけるアプローチの間に繋がりが欠けていることなどが挙げられる。

本書では、オーストラリア（クイーンズランド州）、カナダ、デンマーク、イングランド、フィンランド、イタリア、ニュージーランド、スコットランドの8つの教育制度における教室や学校での形成的評価の実践的取り組みを取り上げている。また、通常の OECD の調査より教室での実践に焦点が当てられている。このようなアプローチにより、本書はこれらの国々で実践されている形成的評価のコンセプトを浮き彫りにするとともに、どうすれば形成的評価の活用をサポート

トする政策を構築できるのかについて分析している。また、どうすれば政策によって形成的評価の普及をよりよくサポートできるのかについても示唆している。

本書は3部構成となっている。

- **第Ⅰ部**ではケーススタディから得られた結論と形成的評価に関する国際調査研究の OECD による分析を提示している。主な結論については以下の小見出しで紹介した。
- **第Ⅱ部**では各参加国で収集されたケーススタディに関するデータを提示している。ケーススタディの対象となった学校は、非常に効果的な形成的評価の有益な実践例として、形成的評価の可能性をよく示しているとの理由から選ばれた。各ケーススタディには共通の要素もあるが、授業や学習へのアプローチは、協同学習プログラム（スコットランド）、授業や学習を刷新するために ICT の利用に重点的に取り組んでいる学校（ケベック）、マオリ人生徒の文化的・学習的ニーズに合うように設計されたプログラム（ニュージーランド）、民主主義促進へのアプローチ（デンマーク）など、さまざまである。各ケーススタディでは、まず学校が運営されている政策的背景の概要を示し、次に教室で行われている授業と評価について解説し、最後に学校指導者が自校の変革プロセスをどのように導いているかを検討している。
- **第Ⅲ部**ではそれぞれの伝統に照らした形成的評価に関する調査研究の背景を記した英語、仏語、独語の文献をレビューしている。ポール・ブラックとディラン・ウィリアムによる英語文献のレビューでは、非常に大きな反響を呼んだ 1998 年のレビューから得られた結論とその後 2 人が教師たちと協力して研究成果をパイロットプログラムで実践に移した経験をまとめている。2 人は、効果的な学習を促進する様々な教室についてはよく知られているが、どうすれば効果的な学習を普及できるのかについてはあまり知られていないと述べている。
リンダ・アラルとルーシー・モチエロペスによる仏語文献のレビューでは特に「レギュレーション」（教師がどのように生徒のための学習を生徒とともに編成するか）というコンセプトに焦点を当てている。2 人は、生徒にフィードバックすることの重要性ばかりでなく、教授法を様々な生徒のニーズに適応させたり、自己評価を行うためのスキルとツールを生徒に提供したりすることの重要性も強調している。
オラフ・ケレルによるレビューでは、生徒は様々な形態のフィードバックにどのように反応するか（形成的評価の主要な要素の 1 つ）という点を念頭に置いて、教育心理学における独語文献を渉猟している。その結論によれば、他の生徒との比較ではなく、学習目標への個人的な到達度に基づくフィードバックの方が影響は大きい。

形成的評価のコンセプトを紹介

第 1 章では、形成的評価のコンセプトを定義し、生徒の学習到達度を高め、学習成果の公平性を図り、「学習の学習」スキルを向上させる形成的評価の効果に関するデータを提示している。本章は、形成的評価の原則が学力を向上させる

べき分野の特定、個々の教室から教育制度の全体に亘る効果的で建設的な評定文化の促進に活用できることを示唆している。本章の末尾で本調査の範囲と手法の概要を示している。

様々な政策アプローチを探る

第2章では、ケーススタディの対象国が形成的評価の普及のために行っている様々な政策について紹介している。教育制度の全体に亘って授業と評価へのアプローチを転換するためには、強力な政策による指導力、訓練・職業開発プログラムと革新的プログラムへの大規模な資金投入、適切な政策インセンティブが必要とされる。本章は政策アプローチの分析の枠組みを構築している。形成的評価の実践を促進・支援し、形成的評価を優先課題と定めている法律や、形成的評価のための総括的評価データの活用を促す取り組みもある。また、効果的な授業や形成的評価に関する指針が国のカリキュラムなどに盛り込まれている場合や、効果的な形成的評価をサポートするためのツールや模範が提供されている場合もある。さらに、形成的評価アプローチを取り入れた特別なイニシアティブや革新的プログラムに多額の資金が投入され、形成的評価のための教師向け職業開発にも資金が投入されている。教育制度の全体に亘って授業と評価の真の変革を促進しようとするれば、教育制度の全体が政策ミックスを強化し、投入資金を増やす必要がある。

形成的評価の様々な要素を理解する

第3章ではケーススタディ調査と国際的な文献調査で特定された形成的評価の様々な要素について検討しているが、着実に浮上してきているのは教室での実践の次の6つの要素である。

- 交流と評価ツールの活用を奨励する教室文化の確立
- 学習目標の確立と個々の生徒の目標到達度の追跡
- 多様な生徒のニーズに合った様々な教授法の利用
- 様々なアプローチを利用して生徒の理解度を評価
- 生徒の達成度に関するフィードバックと特定されたニーズへの教授法の適応
- 学習プロセスへの生徒の積極的関与

8ヶ国のどの国でもケーススタディ対象校の教師は授業と学習の枠組みとして形成的評価の6つの要素を利用し、そのすべてを日常的に実践していた。多くの教師は、自身の授業が一生徒との交流の仕方、学習状況を組み立てて学習目標へと生徒を導く仕方、さらには生徒の成功に関する考え方までも一基本的に変わったと言っている。調査によれば、教師がどのように各要素を活用して生徒の到達度に影響を及ぼしていくかも重要である。

形成的評価の実践を分析する

第4章は形成的評価の各要素の実践例を生き生きと描き出している。実践例は多様な場面から集められたもので、形成的評価に関する議論が広義の原則から形成的アプローチに伴う変革のより具体的な理解へと移行するのに役立つ。本章

では、教師が教室における交流の活発化を促し、生徒の理解度をより正確に測り、生徒の自己評価／ピア評価スキルを育むために活用している具体的なアプローチや手法について解説している。形成的評価の実践は努力を要するばかりでなく、教師が自分自身の役割や生徒の役割に対する見方を変える必要もある。

学校や教室における恩恵と障害に取り 組む

第 5 章は、教師や概して学校が、業務上の問題に直面している中で形成的評価を取り入れることが可能か疑問視している教育専門家の懸念について取り上げている。本章は、ケーススタディのデータを踏まえて、教師が様々な手法を経験した後、大人数のクラスや広範囲に及ぶカリキュラム上の義務といった問題をどのように直接的かつ創意工夫によって解決できるようになったかを示している。経験を得た教師は、扱いにくいと見なしていた生徒に対しても形成的評価法を利用し始めている。本章では学校指導者が変革の着手、深化、持続で果たす極めて重要な役割についても検討している。

政策課題に応える

第 6 章ではケーススタディから得られた結論の政策への含意について検討し、どうすれば政策によって形成的評価の普及を促進・奨励できるかを特定している。教育制度の全体に亘って授業と評価を変革するには強力な指導力が必要とされる。つまり、政策当局者は、授業と学習の質を高め、授業を多様な生徒のニーズに適応させ、生徒の「学習の学習」スキルを助長することの重要性に関する首尾一貫したメッセージを伝える必要がある、ということである。授業と学習に重点を置いた政策では、複雑さを認識し、学習プロセスに関心を払い、様々な指標や結果に関する尺度を利用して学校や教師がどの程度成果を上げているかについての理解を深めるべきである。本章で議論されている 6 つの政策原則は以下のとおりである。

- 常に授業と学習に焦点を絞り込む。
- 総括的評価アプローチと形成的評価アプローチを調整する。
- 教室レベル、学校レベル、教育制度レベルの評定を組み合わせ、各レベルで学力が向上するよう形成的に活用する。
- 形成的評価のための訓練・支援に資金を投入する。
- イノベーションを奨励する。
- 調査研究、政策、実践の繋がりを強化する。

© OECD 2005

This summary is not an official OECD translation.

Reproduction of this summary is allowed provided the OECD copyright and the title of the original publication are mentioned.

多言語版要約は、
英語とフランス語で発表された OECD 出版物の抄録を翻訳したものです。
OECD Online Bookshop www.oecd.org/bookshop/から無料で入手できます。

お問い合わせは OECD 広報局権利・翻訳部にお願いいたします。

rights@oecd.org

Fax: +33 (0)1 45 24 13 91

OECD Rights and Translation unit (PAC)
2 rue André-Pascal
75116 Paris
France

ウェブサイト www.oecd.org/rights/

